

仲仕組創立紀念之碑」解釈

石碑の風化が著しく、欠落し判読不能の文字が多数あり解読は極めて困難です。今後不明文字が明らかになればより正確な解釈がなされると思います。

●は欠落などで判読不能な文字、○は不鮮明で推測した文字です。

仲仕組創立紀念之碑」碑文

明治三十年秋九月鐵路竣工汽車始通爾來汽運一變千里比

隣旅客來往物貨輸漕寂寥之地忽化而為繁華之區實是昭代

之賜也可不謂傳矣績於是碑際所鑄諸子祭大●●●●●

之中糾合同志而●六十有預餘創設仲仕組從事物貨運輸之●

五年●茲矣商賈賴其●遠近●集便宜乎業務日進月踰其●

駸々乎不止獨●我地方之大士不知應用文明之利器而殖產

興業所以報國家倫安送日者集何●哉希視諸士之●可亦以

少愧矣夫人勞心之興勞力二者雖殊所以其端國家一也●●

與所●而無慙焉何暇論心身之優劣余將刻同志姓名於石而

傳千古何不可也銘曰

鑿山架水 鐵路完成 飛烟汽笛 瞬開車輶 記參六十

欲●開明 運物輸貨 ●●日榮 屹一片石 ●●留名

明治三十四年夏七月 ●● 鷗村 小史 撰

碑文全文 大意

明治三十年秋九月鐵路竣工。汽車が通り始めて狀況が一変、以来遠隔地は近くなり旅客が往来し物貨が集まるようになり、寂寥の地が 鉄道開通によって忽ち、繁華の地となった。このことは実に繁榮する御代の賜である。

諸君が時代の變革を洞察し、為すべき大きな務めを果たそうとする績を碑に刻む。これらのうち志を同じにする者六十有余名を糾合し仲仕組を創設、物貨運輸に従事せんとすることに五年の歳月を費やしたが、茲に成し遂げた。

商賣 運送業を指す）は遠近の集荷を仲仕組に頼ることとなり便利になった。これから 運送）業務は日々發展しその勢いは速やかであり止まらないであろう。我が地方の有力者はこの文明の利器の応用 鉄道に適応した運送）に慣れぬが、しかしながら安らかな運送で日頃より集荷する諸君の働きは希に視るべきであり国家に報いる倫である。ゆえに 運送業は）殖産興業と云えよう。

2

又、この業務には幹部と現場労働者の二者があると雖も両者とも その業務を誇りとすべきである。なぜならそれぞれが国家第一の心に依る所から端を発しているからである。私に両者の心身 役割の）優劣を論ずる暇 必要）などあろう筈も無く、將に同志の姓名を石碑に銘し永く伝えることとする。

漢詩の解釈

山を鑿し河に架橋し、鐵路が完成した。烟を飛ばし、汽笛を鳴らし汽車は瞬時に走る。名を連ねた同志六十名は、鐵路が何処までも開かれることを望み、物貨が運輸されて、事業が日々榮えんことを期待する。一片の石碑を屹立して、同志の名を留める。

明治三十四年夏七月

鷗村 小史 撰

訳 長谷川 勲

裏面

設立員 六名)

永岡太助 岡田清五郎 小幡利吉 中山三太郎

保原利左エ門 坂森八三郎 野中仁吉 稲田興作

発起人 六名)

森和四郎 笹岡栄吉 本多宗太郎 稲田三● 端惣太郎 雨谷栄吉

青木真次郎 水野石太郎 八木仙太郎 新田谷初蔵 保原石太郎

水上久四郎 籠島継太郎 野田彦太郎 勝木辰五郎 岡田石太郎

中村仁吉 川道●吉 紺井岩吉 稲田興吉 杉本初蔵 國本駒吉

中山善太郎 鷺津弥吉 小幡捨吉 稲田伊七 牧野石太郎 谷川代太郎

堂下金之助 坂●●太郎 中山吉松 渡辺末吉 坂戸圭二郎

稲田幸太郎 ●●● 永岡継太郎 兼定藤吉 吉田太作 炭田種吉

大淵利三吉 三輪長蔵 野中茂右郎 丸井三五郎 米沢市蔵 栗山寅吉

中●与三五郎 角初五郎 坂本林●郎 米沢弥●郎 川村三吉

石田金之助 富久太郎 吉●●● 坂田弥三吉 保坂●●● 稲田●作

野沢大吉 稲田亀松

側面に長谷川吉郎 中村與三吉 端藤吉 斉藤助七 他四名 判読不能)
反対側面に建碑地所寄附者の名 林根次郎